

A 語句の意味と読み

- (1) おもしろくない。つまらない。気に入らない。ここは「(ありのままの) 真実ではおもしろみがない」の意。／形容詞「あいなし」の連体形が「あいなき」。下に「あらむ」が省略されている
- (2) 読み＝そらごと（「きょげん」と読む本もあるので、お使いの教科書のルビに合わせる）／意味＝うそ。いつわり。事実でない作り話。／★この段のキーワード。この範囲だけで五回出てくる
- (3) そのまま。すぐに。ここは「(うそが) そのまま事実として定まってしまう」の意。／★現代語の「そのうち・いずれ」ではない。古文の「やがて」は時間の間があかないことをいう
- (4) 物の道理をわきまえない。無風流だ。教養がない。ここは「その道を知らない、見識のない人」の意。／★現代語の「かたくな（意地を張る）」より広い。徒然草の頻出語
- (5) 根拠のない、いいかげんなこと。うわついた作り話。／「浮く」＝地に足がつかない。下の「聞ゆ」（＝聞こゆ）は「(そう) 聞こえる・思われる」
- (6) いかに本当らしく。まことしやかに。／「げに（＝なるほど・本当に）」を重ねてできた形容詞「げにげにし」の連用形
- (7) かいがない。言ってもむだだ。しかたがない。／「詮」＝ききめ・かい。「言っても始まらない」という気持ち

B 文法

- (8) 「に」＝断定の助動詞「なり」の連用形。「や」＝疑問の係助詞。下に「あらむ」が省略されている。全体で「～であろうか」と理由を推し量る言い方になる。／★係助詞「や」の結びは連体形だが、ここは結びの語ごと省略されている（結びの省略）
- (9) 断定の助動詞「なり」の終止形。「～である」の意。／体言「虚言」に接続している。伝聞推定の「なり」は終止形（ラ変型は連体形）に接続するので、ここではあり得ない
- (10) 「ぬれ」＝完了の助動詞「ぬ」の已然形。「ば」は接続助詞で、已然形＋「ば」の順接続確定条件。「～てしまうと・～てしまうので」と訳す。／★連用形「隔たり」に付いているので完了。しかも打消「ず」の已然形は「ね」だから、「ぬれ」という形になれるのは完了「ぬ」の已然形だけ
- (11) 完了の助動詞「ぬ」の終止形。「～てしまう」の意。／★④「隔たりぬれ」と同じ完了の「ぬ」。連用形接続＝完了、未然形接続＝打消（「ず」の連体形）が見分けの決め手。なお、完了の「ぬ」が下の体言にかかるときは連体形「ぬる」になる（本文の「言はれぬ虚言」は語注を見よ）
- (12) 下に打消の語を伴って「少しも～ない・まったく～ない」の意になる、呼応（陳述）の副詞。ここは文末の打消の助動詞「ず」と呼応している。／★現代語の「さらに（もっと）」ではない。「さらに～ず」でひとまとまり
- (13) 「ぬ」＝完了の助動詞「ぬ」の終止形。ここは下の「べし」を強める強意（確述）の用法で「きつと～てしまう」の

意。「べし」＝推量の助動詞「べし」の終止形。あわせて「ぬべし」で「きつと～てしまうにちがいない」となる。※「ぬ」を強意と呼ぶ教科書と完了と呼ぶ教科書、「べし」を推量とする教科書と当然とする教科書があるので、お使いの教科書の説明に合わせる。／「つ・ぬ」＋「べし・む」は強意になりやすい。「いとど」は「いっそう・ますます」

C 主語・指す内容

- (14) うそがばれるのも顧みず、口にまかせて言い散らす場合。／直前の「かつあらはるをも顧みず、口にまかせていひちらす」がそのまま答えになる。⑫の巧妙なうそと対になっている
- (15) ⑩のように、自分でも本当らしくないとは思いつつ、人が言ったとおりに得意げに話している当人。そのうそは、その人が言い出したものではない、という意味になる。／「その人」は直前の「～いふは」の人を指す。受け売りをしているだけなので、うそのもとを作ったのは別の人だ、と筆者は見ている
- (16) 「わがため面目あるやうに言はれぬ虚言」＝自分にとって名誉になるように言われたうそ。※「言はれぬ」の「ぬ」は完了の助動詞で「言われた」と読む。完了の「ぬ」が下の体言にかかるときの形は連体形「ぬる」なので、広く行われている本文は「わがため面目あるやうに言はれぬる虚言」。お使いの教科書の本文に合わせる。／「あらがふ」＝言い争う・反論して否定する。自分が得をするうそはわざわざ打ち消さない、という人の心理

- (17) 皆人の興ずる虚言（＝みんながおもしろがっているうそ）。／途中の「証人にさへなされて」の主語は黙って聞いている人。文の初めの「～は」まで戻ると、定まるのは「虚言」だと分かる

D 口語訳

- (18) 世間で語り伝えていることは、真実（ありのまま）ではおもしろくないからであろうか、その多くはみなうそである。／「にや」は「～であろうか」。理由を疑問の形で推し量っている
- (19) （出来事のあった）場所も遠く隔たってしまうと、言いたい放題に話を作り上げて語り、それが文章にも書きとめられてしまうと、そのまま（事実として）定まってしまう。／★「やがて」は「そのまま・すぐに」。現代語の「そのうち」と訳すと不正解
- (20) うわさに聞くのと、実際に自分の目で見る時とでは、どんなことも（印象が）違うものである。／「音に聞く」＝うわさに聞く。「かはる」＝違う。文末の「なり」は断定
- (21) みんながおもしろがっているうそは、自分ひとりが「そんなことはなかったのに」と言ってもかいがないので、黙って聞いているうちに、（その場にいた）証人にまでされてしまって、（そのうそは）いっそう（事実として）決まってしまうにちがいない。／「さへ」＝～までも（添加）。「ぬべし」＝きつと～てしまいう

E 内容・記述

(22) 第一に、人はもともと実際以上におおげさに物を言うということ。第二に、年月が過ぎること。第三に、出来事のあった場所が遠く隔たること。第四に、そうして言いたい放題に作り上げられた話が文字に書きとめられること。この四つが重なって、うそがそのまま事実として定まってしまう、と説明している。／★「人の誇張+年月+場所の隔たり+文字への記録」。記述では「筆にも書きとどめぬれば」を落としやすい

(23) その道を知らない、物の道理をわきまえない人は、むやみに神のようだと大げさにほめて信じこむのに対し、その道に通じている人は少しも信用する気を起こさない。／知らない人ほど大げさに言い、知っている人ほど信じない、という対比になっている

(24) いかにも本当らしく、わざとぼかしたり知らないふりをしたりしながら、話のつじつまだけは合うように語るので、聞き手には見破ることができず、うそがそのまま事実として通用してしまうから。／★口にまかせて言い散らすうそはすぐ㊟「浮きたること」と分かる。その差が「恐ろしき」の理由

(25) 自分にとって都合のよい（名誉になる）うそはわざわざ否定しないという心理と、みんながおもしろがっているうそを自分ひとりが打ち消してもむだだとあきらめ、黙ってしまう心理。この二つの沈黙が、うそを事実として定着させてしまう。／★黙っていると「証人にさへなされて」しまう。うそを広げるのは語り手だけでなく聞き手でもある、という指摘

F 文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 作者＝兼好法師（吉田兼好・ト部兼好とも呼ばれる）／鎌倉時代の末期、十四世紀前半に成立したとされる。／出家して隠者として暮らした人。二百四十余段からなる随筆

(27) 『枕草子』＝清少納言／『方丈記』＝鴨長明。／★平安時代＝枕草子、鎌倉時代＝方丈記・徒然草。成立の順で覚える

(28) つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。／「あやしうこそ～ものぐるほしけれ」は係助詞「こそ」の結びで已然形。書名はこの書き出しの「つれづれ」から

【現代語訳（全文）】

世間で語り伝えていることは、真実（ありのまま）ではおもしろくないからであろうか、その多くはみなうそである。実際にある以上に（おおげさに）人は物を言うものであるのに、まして、年月が過ぎ、（出来事のあった）場所も遠く隔たってしまうと、言いたい放題に話を作り上げて語り、それが文章にも書きとめられてしまうと、そのまま（事実として）定まってしまう。

それぞれの道の名人のすばらしさなどについても、その道を知らない、物の道理をわきまえない人は、むやみに神のようだと言うけれど、その道に通じている人は少しも信用する気を起こさない。うわさに聞くと、実際に自分の目で見る時とでは、どんなことも（印象が）違うものである。

一方ではうそがばれるのも気にせず、口にまかせて言い散らすのは、（聞いていて）すぐに根拠のないいいかげんな話だと分かってしまう。また、自分でも本当らしくないとは思いながら、人が言ったとおりに、鼻のあたりを動かして得意げに話すのは、その人が作り出したうそではない。

いかにも本当らしく、ところどころわざとぼかして、よくは知らないふりをして、それでいて話のつじつまを合わせて語るうそは、恐ろしいことである。自分にとって名誉になるように言われた（本文の「言はれぬ」は完了の助動詞「ぬ」。語注を見よ）うそは、人はたいして言い争って否定しない。みんながおもしろがっているうそは、自分ひとりが「そんなことはなかったのに」と言ってもかいがないので、黙って聞いているうちに、（その場にいた）証人にまでされてしまつて、（そのうそは）いつそう（事実として）決まってしまうにちがいない。